

激動期を生き凌いだ詩人

——ヘンリー・ヴォーンの全自作詩試訳完了

森 田 孟

本誌前号の最後で取り上げた「執念深い運命」〔M・六三四—三七〕〔「続小考（七）33—42」〕は、長年の年長の親友パウエルに向けて書かれた形の力作で、ヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621—95）の最後の詩集『タレイアー』のだけでなく、彼の全作中の代表作の一篇と見做しても差支えあるまい。

その詩は、まず、自分を降伏（fall）させよう、滅ぼそう（ruin）とする〈運命〉に、「君」（運命）の臣下（thy subject）である自分自身を貶む、と揚言し、「君」に憎まれるのが私にとつての最良の〈遺産〉になるのだ（「Thy hate's the best Inheritance for me.」）と挑戦する。〈運命〉に「君」（thou）と語りかけながら、突如パウエルに視点

が移って「あなた」（you）と呼び掛ける。そうこうしながら、自在に視点の動く〈空想〉（Fancy）が「私」を捉え始める。「私」は「息を引き取れる（I can expire）」＝「死ねる」存在なので、人間を構成している全てを分解できる（can...analyse all that's man）。それで、宇宙へと視線を向けて、自分を構成しているもの——土、能力、緻密さと術、情愛、誇り、向う見ずと無遠慮、強欲、魔術と詐欺——を、それぞれ順に、地球、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星へと放出してゆく。そうして縛れが解けた自分の〈魂〉の火は洗練されて、何もなくなくなった状態となり、軽やかに飛翔して〈最高層の〉光（the Empyrean light）に到り、一個の〈純粹存在〉（Essence）となって天

使や精霊と一緒に「私」は暮らすことになる。と、空想が展がってゆく。

他方、「あなた」パウエルを、土星の領域に休ませるのは、「私」の、それも「暗い〈想像力〉」(my dark Imagination)だと述べて、〈空想〉と〈想像力〉とがさり気なく識別されているのは注目されよう。その両者を詳細に区別してみせた後の(一八一七年)コウルリッジへと繋がってゆくだろうか。

* S.T.Coleridge, *Biographical Literaria*, ed. & Aesthetical Essays by J.Shawcross, 2 vols. (Oxford University Press, 1962 [First Edition, 1907]), 第四「一〇」三章を参照。

「私を賢くするのは貧困だ」(‘Tis poverty that makes me wise;)とか、「〈空っぽ〉に匹敵する〈祝福〉はなご」(There is no Blessing to an Emptiness)などの警句めいた文の幾つかと共にこの作品は、〈運命〉と格闘する夢想に現代の読者をも深々と惹き込んでゆく秀作であった。

この詩が、質・量共に見事な蔵書を世界に誇るポドリーの図書館を讚える詩「続小考(一) 21-24」の次に配置、というのも心憎い技と言うべきだろう。人に〈空想〉を促

し、〈想像力〉を駆使させる原動力の重要な一部になるのは、先行の書籍類に他ならないのだから。その、図書館讚歌の詩の直前に、そして、やはりヴォーンが感心した著書を讚えた「パリンゲニウス」(前号、「続小考(七) 30-33」)の直後に現れるのが、次の作品である。

この詩集に収録されている、同じ人物に関連する三作品の最初的一篇で、軽妙な社会批評の詩である。一〇音節詩の二行連句、四二行の作品。

著者も共にロンドン在住中の

リュシマコス⁽¹⁾へ

*To Lysimachus, the Author being with him
in London*

会わなかったね リュシマコス、昨日は、ほくたち
あの綺麗な〈空気〉をそのままに吸い込んだし、
ほくたち自身もそのままだったが、あの装った〈伊達男た

ち)の

諂い^{へつら}ぎまど、一歩ごとに交わし合う何かしらの〈お世辞〉
たらたらぶりときたら?

何と不思議な 途方もない〈凶形〉を連中は描いたことか
〈両脚〉と〈両腕〉で、ぼくらの全く知らなかった類のもの
のだ

エウクレイデスやアルキメデスでは。それにその全て
学識に富む行で〈詩〉でも〈散文〉でもないものはない？
何と大量の〈レース編み〉がそこにはあったことか、何と

〈黄金〉が
豊かな〈痕跡〉を残していたことか、おまけに敢えて

その誇らし気な物を値踏みまでしてその〈粧し屋ども〉を
嘲笑した様ときたら、彼らの誇りの一部だったもので？
連中が我らを目指して大胆にも呼びかけた有様ときたら
まるで我々は彼ら皆の〈召使い〉で 我らそのものを輓で

繋いで
彼らの〈椅子駕籠〉と〈豪奢〉の担ぎ手にすべく過酷な運

命で

そこへ送られてきた哀れな〈人間ラバたち〉みたいでは？
あらゆる野心の中でもこれは最小のものではなかったのだ
その意向が 人間を獣に変えたのだった。
どのような無茶な話し合いをあの〈英雄たち〉は受け

入れたのか？

この〈貴婦人〉は彼らの〈友人〉だった、だから大変な
〈支配者〉なのだ。

どれ程多くの〈血〉がその中に入ったのか？分るだろう
彼はベヴィスとそのアランデルに由来したのだ
モーグレイはまだ彼が身につけていた だから彼なら為し
遂げただろう

それでもって彼の古の〈祖先〉よりも多くの偉業を。

ぼくの〈友人〉はこれに驚くだろうか？ それは何だろ
うね君には、君はもつと名門の〈家系〉を提出できるし
全く真実のところ 君の血縁の〈魂〉を支持できるのだよ
どこかの明るい〈星〉とか〈ケルビム〉に對してね？。

これらがやたら気前のよい気分のうちその夜を
同じ罪を犯しながら過ぐすと 彼らは光を追い払い
君の習熟した儉約が彼女を利用するが、他方彼女は
自らの炎立つ〈大型本〉を君に頭に示す、

すると分離された個々の空とそれぞれ明るい〈ランプ〉
を注意深く思いを凝らし眼を見張って眺めながら

君は 〈大自然〉の最大の閉ざされた部屋部屋からぱつと
〈天界〉に姿を現して、そこで 〈星々〉と話を交わす。

個人の秘め事ですか 〈暗くなら〉ないような

無邪気な 幸せな夜は うまくいってくれよ、
 そして偽りの世界の栄光だけは免れながら
 それにも伴うあの弱点は 全て避けてくれよ！
 彼らの不正入手と不正授与の賞讃を聞いても苛立たずに
 君の最も暗い夜なはこの上なく明るい昼日中を凌いで
 輝くのだ。

[M・六三二—三三]

訳注

- (1) 正体不明。全くの想像上の人物の可能性が高い。この詩の社会批評の責任を作者自身が負おうとするもの。ロンドンの〈伊達男〉の馬鹿気た尊大さへ作者の思いを劇化し、想像力によってもっと豊かな生活を送れる作者自身の能力を、報復のようにして主張するもの [Ma・二九四]
- 四] 当時流行のフランスの伝奇物語類を賞讃する人々が採用した筆名の典型で、これは特にオリンダ [続小考 (二) 47・訳注 (6) 参照] の文学仲間が装った [RA・六五六一—五七]
- 実際、双生児の弟トマスだったかも知れない [H・3]
- この人物の正体は不明だが、この名前のマケドニアの將軍 (三六一?—二八一 BC) が実在する。

- (2) What...Diagrams...Legs and Arms 伊達男たちの気障きざりな気取った立ち居振舞いへの諷刺表現。
- (3) Euclid エウクレイデース、紀元前四世紀頃のアレクサンドリアの数学者・教育者、ユークリッド幾何学の大成者、主著『幾何学原本』。
- (4) Archimed = Archimedes (c.287-212 B.C.) アルキメーデース、シチリアの数学者・博物学者。
- (5) Whose learned lines...Proze 数学者たちが例証する数字や図形への機智表現。尚、疑問符(?)と感嘆符(!)とはヴォーンの時代、交換可能だった [Ma・二九五]
- (6) What store of Lace was there レースは贅沢品なので流
 行の見せびらかしの証 [RA・六五七]
- (7) Gold = the gold lace [Ma・同]
- (8) Traces 長衣などを調整するための金・銀糸で編んだ紐や、平たい鬚織り (OED trace Sf²) [RA・同]
- (9) but withall made bold / To measure the proud things
 黄金は、粧し屋たちが互いの値打ちを量る尺度なので、事実上彼らが道徳面で劣っていることの判断になるもの [同]
- (10) Sedans and State = pompous sedans. 二詞一意 (then-diadys) 「豪華な椅子駕籠」 [同]
- 'sedan' は二本の棒の上になわたして乗せた、囲りを覆い閉ざした椅子で、前後に一人ずつの二人で運ぶ。重要

- 人物の乗物とされた。イングランドには一六三五年頃に導入され、二世紀余り使用された【Ma・二九六】
- (11) *Menmules* セタンを運ぶ人々への負担に賛成しかねる気持を示している表現【同】
- (12) *Of all ambitions...man into a beast* 社会がセタンを受け入れたことを軽蔑した評言【同】
- (13) *blind discourse = talk lacking in discernment*【弁別力のなく談話】【RA・六五七】
- (14) *Lady* 前行の「談話」で話柄となった女性であろう。後の作品の「ファイダ」になるだろうか。
- (15) *How much of Blood was in it* 計画の上での故意の曖昧表現で、「彼らの談話ではどのくらい血筋の自慢が交わされたか」と「それは血腥い争いだったのか」の両義。その粧し屋どもは、自らの高貴な家柄と闘争への興味・武勇との両方を印象づけようとしている【RA・同】
- (16) *Bevis and his Arundel* ベン・ジョンソンの「大胆なベヴィス卿とそのアランデルの／自国産の伝説…」(*Epigram to the Earl of Newcastle, Underwoods* iii, 9-10) 参照。フランス語版が最初一五二〇年に出た伝奇物語作品で、英語版では『*The Historie of Sir Bevis of Southampton*』の題で少なくとも二回（一五六五年頃と一六二〇年頃）出版された評判の騎士物語の主人公とその愛馬【Ma・同】【RA・同】
- (17) *Morglay* 字義通りでは「大剣」、ベヴィス卿の武器【RA・同】
- (18) *Grandshire = Sir Bevis*, その粧し屋 (*top*) の自慢になる【Ma・二九七】
- (19) *thy Soul of kin...to a Cherubin* ヴォーンは、友人の魂が天上に起源があることを強調したくて、それを、ディオニシウス・アレオパギタ (*Dionysius the Areopagite*)【アテネの学者、紀元五〇年頃、聖パオロによってキリスト教に改宗「使徒言行録」17・34。近年では五〇〇年頃のシリア地方の学者の偽装とされる】の、天上の階層では恒星の領域を支配するケルビム（智天使）と結びつける【RA・六五七―五八】
- (20) *profuse mooks = profligacy* 「浪費、放蕩」【RA・六五八】
- (21) *her = the night*【Ma・二九七】【RA・同】二行前の。
- (22) *her fiery [fiery] Volume* ハビンググトンの「各大空の大きな書物」8（詩篇）19・2「夜は夜に知識を示す」からを参照【RA・同】
- ここからの六行（...with the Stars）人間各人の人生での主な目的は、〈神の精神〉を出来る限り十分に知り、それと少しでも密接に結合すること、というのがルネッサンスの宗教思想の基本要素であった。気儘な背信によって、本来備えていた神の真の知識を失うことになったエ

デンの園での罪を贖うには、墮落した人間は二冊の書物——「バイブル」と「自然という書物」——に依らねばならなかった。「執念深い運命」「続小考（七）」41 訳注

(59) 参照

ヴォーンは、当代の多くの作家同様、大空を（自然の書物）の特別に重要な一部だと考えたが、それは当時の新しい科学の諸発見とは矛盾するにも拘らず広まっていた一般的な宇宙観——宇宙の天空の部分は不純な地上の部分とは異なつて純粹で変化しないもの——のせいであろう。だから、ルネッサンスの精神にとつては星は自然の中でも本質的に神に近い部分を表している、という点で特に魅力に富んでいた。人間は内部に在る精神的な要素によつて、「星の領域」に住んでいてその領域の動きを制禦している「Intelligencies」〈支配霊〉に特別親近感を抱いているのだ、という考えがこの詩に在る。「Ma・二九八」

(23) the separated skies 大空は我々から、実際の距離と、大空と我々との霊的な状態の違い、との両方によつて分離されていると言われている。「RA・同」

(24) their = the tops 「粧し屋たちの」[Ma・二九九]

ヴォーンが父親の要望でオックスフォードを途中で切り上げて法律を学ぶためにロンドンに赴き、そこに滞在した

のは、おおよそ一六四〇—四二年のほぼ二年間ぐらいとみられている。「H・三〇—四七」。おおよそ、とか、ほぼ、と言うのも仕方がない。ヘンリー・ヴォーンの生涯については、ギニー、モーガン両嬢の熱意「GM」やハッチンソンの精査にも拘らず、不明なままの部分が多くない。彼が生れた月日を始め、二度結婚したその年月日、最初の妻の死亡年月日など、公の記録が脱落していて分らず、彼が医師の資格を何処で何時取得したかも記録が見当たらないという「H・一八一—一九四」。肖像画の類も皆無である。

ロンドン在住中、と標題にあるこの作品だが、ベヴィス卿なる人物の登場する騎士物語ばかりか、ユークリッドやアルキメデスにまで言及して内容を膨張させながら、「粧し屋」の「伊達男たち」を代表にして当時の首都の世情・風俗を諷刺して間然する所がない。如何にもこの作者らしい作品であろう。

次に、先刻触れた既に見た二篇——ボドリー卿の図書館を讚えた詩と「執念深い運命」——に続いて、親しい従兄弟への祝婚歌である。

ホワイトホールのI・モーガン⁽¹⁾殿へ、その突然の旅と
引き続いての結婚について

To I. Morgan of White-Hall Esq. upon his sudden
Journey and succeeding Marriage

そうして⁽²⁾ 我らの寒い荒涼とした⁽³⁾ あらゆるものに活気の
なくなる⁽⁴⁾ 〈世界〉から

彼の暖いインド亜大陸へと 明るい太陽が退いてゆく。

そこはあの⁽⁵⁾ 〈黄金〉と香料の地方で

芳香が彼の巡行を、喜びが彼の〈両眼〉を、満たす。

それらは改めて活気づいて戻ってくる

火を 〈紅玉⁽⁶⁾〉 〈水晶の〉 日にと 運び込む、

そして証明するのだ 〈光〉 はもつと温和な 〈風土〉 でな

ら 更に働きかけられると ここでの人間よりは感覚の

ない 〈石〉 の方に。

しかしあなたは 輝く定めだった人らしく取り込むのだ

〈光〉 と 〈熱〉 の両方を、〈愛〉 と 〈慧智〉 は紡がれていっ

て一本の糸となり、それとしっかりと結びつけるのだ

その 同じように明るい 〈祝福〉 を子孫に、

それはこうして伝えられて 〈王冠〉 の 〈宝石〉 のように

あなたの 〈名前〉 と共に 永遠にあなた自身のものへと降
りてくる。

私が死ねば 悪意か無視が生れ

その最悪のものが私の亡骸に反映させられるだろう

(というのも 〈詩人たち〉 はまだ名前を何ら残さなかった

から、唯、人々が余りにも嫉妬したり軽蔑したような名は

別だが)

あなたはそのどちらでもない (それに どういう状態の方

が優れているのか?)

〈健康〉 のような正当な 〈名声〉 は欠けることも増えるこ

ともないのだから)

時代が 〈完全な〉 ままで あなたの惑星の 〈火〉 同様

常に染み一つ無く輝いていると分った後まで。

単独で輝くものはない。あなたの美しい 〈愛しい人〉 が

加わって⁽¹²⁾ あなたの輝きを引き立て祝福するのだ。

あの明るい 〈結合〉 から人々が 彼女とあなたを

取り巻いている 〈星座〉⁽¹⁴⁾ を見ることが出来るまで。

そのように二本の芳しい 〈薔薇の芽〉 が 〈乙女の寢床〉

から

まずそつと覗き見て頬を赫らめ それから口付けし 頭を

くつつけ合う、

遂には年ごとの祝福が自らの蓄えを増やして

あの二本が二十と二本以上まで数えられるようになり

その美しい〈盛り土〉は(天国の気前のよい報獎金で〈冠

を授けられて)

選り抜きの〈才士〉と〈美人〉で溢れかえる、

遂には時が、〈花々〉のように〈家族〉を遠くまで広げな

がら

彼らを〈花の冠〉を求めて最上の人々へと赴かせる。⁽¹⁵⁾

そうなれば最近の子孫が(もし偶然か、何か

弱々しい〈木霊〉が、殆ど全く消えて声が出ないまま

彼らに告げてくれるならだが、その〈詩人〉が誰だったか

どのような

彼は生きてあなたを愛したのかも、あなたは御存知だが

真直ぐ私の墓まで〈花々〉と香辛料を

〈光〉と〈讚美歌〉共々届けてくれるだろう、そして〈捧

げ物〉としてそこで こう真実を明言してくれるだろう、

〈愛〉が(昔は

盲目だと非難されていて更に悪い〈犯罪〉を招くものだった、

もし心が直せなければだが)あなたのために私の中に

彼の〈眼〉を両方共見出して 全てを予言して見てくれた

のだと。

[M・六三七—三八]

訳注

(1) ジョン・モーガン (John Morgan, ?1699) は、ヘン

リー・ヴォーレンの従兄弟で、近隣のフランデティ

(Llandety) のウェナハトゥ (Wenall) — このウェール

ズ語、英語化すれば 'White Hill' — ヴォーレンの居住地

ニュートンのアスク川の対岸) —に住んでいた。「ホワイ

トホール」のウェールズ語なら 'Newaddwen' (ノイア

ズ・ウェン)。彼の結婚の日付は知られていない [H・二

一七、二二二]

(2) So 太陽とこの詩との類比がすぐ続くことを先取りする

語 [Ma・三三四]

(3) our cold, rude World 教養人は地中海地方の文化度を考

慮しながら、イギリスの風土の荒涼さが詩や哲学の成功

の障害だと信じていた [RA・六六四]

(4) Inuis 当時は、東西インド諸島とインドを漫然と指し

ており、ギアナ (「執念深い運命」[続小考(七) 33-42]

九四行目) やアメリカ (「ある悲歌」[続小考(四) 19-

21] 一七行目) 同様、その神秘の雰囲気から、表現し難

- い富や美と結びついていた。古代神話の理想郷エーリュシオンになっていた【Ma・三二四―一五】
- (5) progress = royal progress or procession 「国王、政府高官などの、視察旅行、巡行、行幸」【Ma・三一五】
【RA・同】
- (6) Fire into Rubies, into Crystals day ルビーと水晶に反映している色を宇宙の「光と熱」(一〇行目)の象徴だと作者は考えていた。ディオドロス・シキュルス(Diodorus Siculus [紀元前一世紀後半のギリシャの歴史家、『歴史文庫』四〇巻著述])に由来するとされる、太陽には錬金術の力があるとする理論に、示唆されている。シェイクスピア『ジョン王』Ⅲ・i・77-80 「今日の日を荘厳にせんものと輝かしい太陽が／歩みを留めて錬金術士を務めて／その貴重な眼の光で変えようとしている／つまらない土くれの大地をきらめき輝く黄金に」参照
【Ma・同】 【RA・六六四―六五】
- (7) shine 字義通りの「明るくなる」と、譬喩での「人物の面で秀でる」の意を含有することで、太陽とモーガンの人格との類似を促進する【Ma・三二六】
- (8) Into one thread 太陽光線と糸との類推は、「泣きぬれるアモレットへ」【続小考(四) 32】六一―七行目(「太陽光線」のあの〈糸玉〉から／：糸の一本も」参照【同】
- (9) Intra'il d (= entailed) = bestowed; conferred 「授ける、与える」。土地を授ける過程を表す法律用語の、譬喩としての使用。「彼の友人――へ」【続小考(五) 11】二行目と訳注(2) 参照【Ma・同】
- (10) both 四行前の 'malice' 「悪意」と 'neglect' 「無視」【RA・同】
- (11) like Health, nor wants, nor swells 「肥りすぎずも痩せずきでもない健康な人のように」【RA・同】
- (12) access = addition; increase. 'Love' (〈愛しい人〉は「妻」を指す【Ma・三二七】
- (13) Conjunction 通常の「合体・連帯」の意と共に「二つの惑星の出逢い」【RA・同】／「パリンゲニウス」【続小考(七) 30-31】の一〇行目参照【Ma・同】
- (14) Constellation 結婚によって期待される子供たちを明るく星々の固まりに譬えての言及は、慣習に従った凝りすぎの褒辞【Ma・同】
- (15) the best of heads 結婚の際立った伴侶【Ma・同】
- (16) Love...censur'd blind 古典ではキュービッドを目が眩んでいるとしていて、彼が相手を気紛れに選ぶといわれる説明にする【Ma・同】
- (17) and will contract worse Crimes / If hearts mend not 明らかに傍白の部分なので、その意味を確定し難いが、王政復古「一六六〇年」後の宮廷社会内での、緩んだ倫理の水準に触れているのだろう【同】

この従兄弟は、セントデイヴィッツ「ウエールズのダヴェド (Dyfed) 州西部の町」の法官ウィリアム・オーブリー博士 (Dr. William Awbrey, chancellor of St. Davids) の娘と結婚した「グロサルル、ii・二二二」[Ma・三一四]

書誌学上の証拠から、この詩は一六五〇年以前の作ではなく、それより大分後に「訳注(17) 参照」書かれたと思われるもの「Ma・同」。

今は時代が不「完全」だという残念な思いが、この作者の念頭からいつも離れない。それがこのような祝婚の詩にも現れるところが、ヴォーンらしいし、この詩を「あなたの子孫が嘉よみしてくれて、「私」の墓詣でをしてください。ことまで期待するユーモアの滲む機智が、やはり面白い。

「時が〈花々〉のように〈家族〉を広げる」という三三三行目と、「真直ぐ私の墓まで〈花々〉と香辛料を届ける」という三九行目が一一音節以外は全て、一〇音節詩行二行連句、四四行の詩。続いてすぐ、リュシマコス関係の作品になる。これは、八音節詩行(但し、冒頭の二行を含む六行が九音節、六七行目が一〇音節)二行連句七四行の詩である。

ファイダ⁽¹⁾、即ち田園の美女。リュシマコス⁽²⁾へ
FIDA: Or The Country-beauty:
to Lysimachus

もうほくは彼女に遭ってしまった、それでキューピッドに
よつて⁽³⁾

その若いメデューサ⁽⁴⁾は ほくの分別を失わせたのだ!
ある顔が、〈恋する人たち〉を誰も殺害^{レイ}したことはないが、
支配力を欲しがって 尊大なまになつてゐる。

〈粧し屋〉は誰もがじろじろ見るだろうから
眠つてゐる〈王族〉を。

しかし彼女は(美しい〈暴君〉!)嫌がるのだ
見詰めておきながら罰を受けない者がいるなんて。
彼女の慎重な(厳しさ)は勇気を振つて耐えて
蔑むのだ ひいひい泣く涙の策略を、

あるいは溜息を、あの偽の 悲しみの武器(一切)を、
それは殺すものではなく 安堵をもたらすものだ。

また こういう(苦難^{キル})の際、唯一人で
いるのは 君⁽⁵⁾の辛い宿命^{フエイト}ではない、
やつては来たものの去つてゆくことになるほくは

咲き開いたばかりの〔薔薇〕のように甘美な〔息つき〕ぶりだ。

この〔岬〕と〔大海原〕との間に、

ということは 豊饒で花咲き充ちる〔平原〕に 横たわるのが彼女の美しい〔首〕で、肌理細かく細っそりしているの
で〔穏やかに〕君の喜ぶ様が見ものだが、それが彼女を
屈服させる。

これが君を彼女の〔心臓〕に導くが、それはぎゅつと掴

まれると

真白な〔寒冷紗〕の〔敷布〕の間で激しく鼓動する、
それで初めのうちは大いに悩んでいるようにみえるが、
気高く扱われて 安堵するに到る。

ここで新雪で造られた二箇の〔玉〕のような
彼女の〔乳房〕を〔愛〕の天然の枕が育てる、
そしてその各々から〔薔薇の芽〕が〔覗き出る〕のを
美しい〔幼な児〕が吸いながら、眠りにつく。

さあ、ねえ、吾が〔禁欲家〕さん、〔美人〕を
見ても〔優雅な人〕に逢つても悉く撃つ面をして

汚らわしい と叫ぶなんて！ 尤も君自身はあらゆる

粗野な汚れた暗礁⁽²⁰⁾には知られているのだが。

君なら見ることが出来るのでは？ このような例に、

〔甘美なもの〕と至福に充ち満ちた例に、

姿形は甚だ稀な〔魂〕は大いに豊かな例に、

君なら誓つてみせないだろうか 彼女は魔女なのだ⁽²¹⁾。

〔M・六三八—四〇〕

訳注

(1) Fida リュシマコスの恋人、全体の虚構のせいでヴォー

ンは、思うさま彼女を賞讃できる〔RA・六六五〕

ファイダは、ブラウンの『ブリタニアの牧歌』(Browne's
Britannia's Pastorals, i, 3, etc.) に出てくる名で、「忠実な」

'faithful' という意味〔M・七五八〕

(2) Lysimachus 前掲作訳注(1) 参照。

(3) And by Cupid...stupid ジョンスンの次の一節と比較の
こと、「私は愚かどころではなかった／走ってキューピッ
ドを訪れたのだから」(Jonson, "How he saw her", 5-6)
〔Ma・三二八〕

(4) Medusa ギリシャ神話の女性ゴルゴン三姉妹の一人。
その髪はくねり纏わる蛇で、それを見詰めた者は皆、石
に変わった。ヴォーンは軽い気持でファイダの美しさの力
を伝えるのに採用した〔同〕

- (5) thy = Lysimachus' [RA・六六五]
- (6) to do' t = to 'plague' observers or the onlookers
[RA・六六六]「(見物人、観察者、見詰める人々を) 微らしめる」[Ma・同]
- (7) the true = the original 実際の「頭」、現物 [Ma・同]
- (8) curious Sets/ And Twists 『燧石』所収の「マゲダラの マリア」[小考(四)14]一七一―一八行目、髪の色々な結い方の描写「…その玩具「彼女の髪」を／手入れて／渦巻く、(地球儀)、艶かしい怒り(巻き髪)に結ったのか。」と比較のこと。婦人の髪は恋人の心を捕える罫だという認識 [RA・同]
- (9) [play' d at] *Hit or Miss* = a country dance [田舎の舞踊] [同]
「運を天に任せて、成り行き任せで、投げ遣りに、でたらめに」'at random: at haphazard: happy-go-lucky' (OED hit v III 22 *Hit or miss*)
- (10) The God of Love...Curls and Rings じりからのキューピッドの描写は、「薔薇十字会員」(Rosicrucian) [十七世紀ドイツに起こりヨーロッパに広まった精神運動の共鳴者。伝説上の人物ローゼンクロイツ (Rosenkreuz) が創設したとされる。密教的神秘主義の面と当時の改革的思想の面とを合せ持っていた]の大気の精を強く示唆する [Ma・三一九]
- (11) Like swift Salutes...Crimson Mornie 「挨拶」とは「接吻」のこと。シェイクスピア「ソネット」33番「幾たびも見てきたものだ 輝かしい朝が：／黄金色の顔で緑の牧場に接吻したり…」、あるいは「白い昼日中」'a white noon' とは、積雲で曇らされた「昼日中」で、ウォーンは、早朝の鈍い赤色が過ぎ去ってから真昼の炎え立つ白い光に呑み込まれるまでの、太陽光線の状態を考えている [RA・同]
- (12) close restraint...Tyrant law 処女であることは、それを奪い取りたい志望者を「隙のない制禦」下において「畏怖」させる故に、暴君性を帯びている [RA・同]
- (13) *Linnet* アトリ科ベニヒワ属の小型の鳴鳥。この直喙の要点は、この鳥が歌をうたう鳥だということ [同]
- (14) the Key to potent spells 強力な魅惑の源であるその婦人の声を開け閉めする鍵が、その舌 [Ma・三一九] 四五行目の 'Her equal Teeth' からじりまで、次と比較のこと。「あなたが閉ぢ唇はごうごうしても同意／しようとする その舌の監禁に」(Cleveland, 'To Mrs. K. T.')
- 「その〈舌〉は、もし〈齒〉の垣根を壊せば／他の人々に恥をかかせ、自らの〈破滅〉を語ることにしろ」(Randolph, 'Necessary Observations') [同]
- 当代の他の詩人たちに類似のイメージ、表現、発想がみられることの指摘は、読者には有難い。

- (15) Bewixt this Headland and the Main 彼女の頭から胴まむ [同]
- (16) her = the neck (前行の) [R・A・六六六]
「首」が彼女全体を表す（提喻）であることを自ずから示している。
- (17) Lawn 無地または捺染した極く薄地のリンネル、もしくは木綿布。
- (18) Here like two Balls...sleeps ハリからのこの四行、「彼女の胸は（美人の玉座がびつたりの場所だが）／愛と悦びが居座る二個の球体を保ち／それは二個の華麗な丸いルビーを頭に載いて／雪から生えてきた気紛れな薔薇の芽のようにみえる」（Herrick, "The Description of a Woman"）参照 [Ma・三三〇]
- (19) my Stoic 一、リュシマコスを指すだろう [H・八八]
二、そうではなく、一般に禁欲的な精神の人。この行までの主題の「大胆な」展開を半ば気紛れに正当化するもの [Ma・三三〇]
- 三、愛と美への無関心を公言した禁欲的な哲学者たち [R・A・六六六]
- 一、のリュシマコスで、二、と三、を代表させている。そういう作品だから、この詩は大変面白いのである。
- (20) stifle 不注意な水夫を待ち伏せする、水面下に隠れている砂堆。譬喩として、畏にかけるようなもの。ペンロ

- ウズの「それ故君を思慮に欠けるそのような悪徳の砂堆から脇へ逸らすために」（Benlowes, *Theophilus* の序文 [一六五二]）参照 [R・A・同]
- (21) Say now my Stoic...she is a witch この最後の八行、ハビングトンの「禁欲家は、安易な情熱を悉く避けるので／彼なら聞けそうだ 彼らの眼の言葉を／異端の者たちが彼の信仰から 彼の宗派の／教義を取り去り、愛を實踐するだろう時」（Habington "To Castara, Upon the mutual love of their Majesties"）と比較の点と [Ma・同]
- この作品は、とマリラは言う、ヴォーンの通常の詩の書き方とは殆ど全く異なっており、主題が単に慣習（Conventionality）に依っていることと、形式の軽さ（lightness of form）の点で彼の愛の詩の大半からも掛け離れていると。そして、王党派詩人（Cavalier Poets）「チャールズ一世の宮廷に集った一群の英国詩人、Herrick, Carew, Lovelace, Suckling, etc.」の流れへのヴォーンの興味を反映するもので、彼が『燧石』の序文（二六五五年）で後悔するように述べた自らの「最大の愚行」（*greatest follies*）（小考（四）23）の見本かと [Ma・三二七—一八]。
- マリラにずい分低い評価をさせた要因（彼の見解どおり

だとして）そのものが、筆者には彼のとは真反対の評価をさせる。ヴォーンは、彼らしくないとマリラに見做されるような書き方も現に出来た詩人なのであり、それこそがヴォーンらしきであって、イメージ、表現、発想、更には主題に、慣習に依っていると看られるような部分が仮りに少なからずある（とは筆者は必ずしも見做さないが）からといって、その作品全体が慣習の域に留まるわけではないの
は言うまでもない。

俗語めいた感じを惜しまず出しながら、一二行目の「殺すものではなく安堵をもたらず」「それ」（九行目の「慎重な（厳しさ）」も備えたファイダの（それも、リュシマコスなら、というところが憎いなあ）「魔女」とも言える（に相違ない）絶大な魅力を活写して余りある、諧諷と諷刺の香料を振りかけた軽妙な名品ではあるまいか。

マリラ自身も、語句に施してくれている註釈（訳注に適宜紹介済み）からは、先刻の総括の評言ほどこの作品を、
低く評価しているとはみえないけれど。

この作品についてハッチンソンは、『燧石』とは調和しない唯一の詩であり、ヴォーン自身が「無益な（詩）」（*idle Poems*）だと厳しく非難した（『燧石』の序「M・三八

八」〔小考（四）20〕ものの例と見做したせいでか初期の詩集から除去した一篇だろうと述べるが、同時に、詩人が自らにもっと自由を認めようとしたからだろうがなかなか良く出来ており、彼の他の愛の詩より遥かに生氣に満ちている「H・八八」と、正當にも褒めている。こういう詩も書けた作者だから、『燧石』を生み出したとも言えよう。

続いて、ファイダがもう一篇に登場する。

見捨てられたファイダ

Fida forsaken

愚かだった 私は！ 血を信ずるなんて

立派なことをし、それから最善を果して膨れ上っている時

のなどのを、

そして偽物、忘れっぽい人間などを、

我らの真物の（神）以上に（牧神）を信頼するなんて、⁽¹⁾

あのような膨れ上りは浮腫にまで到り、

あれ程立派なものが この上なく卑しいものに向かう。⁽²⁾

だから欺かれて生きよう！ そしてファイダよ そのよう

(3) に生きることで 忠節を無効にしよう。

何故なら間違つた生き方で賢くなる人もいるだろうから、その一方死は、これ見よがしの〈不正行為〉を窒息させ、欠陥のあるものを飾り分けて 〈窓の錠戸〉で最も値打ちのない精神を隠すのだが。

それでも君は 隠すのに出来る限りのことをするがいい
劣つた樹の果実は 見つけられるだろう

最初は彼の暗い心の中で、今度は忌々しくも彼の顔の中で生じたあの悪辣な罪のせいでも、
それであの、生命が棲んでいる筈の〈眼〉が、
〈死〉と〈地獄〉の穴のようにみえるのだ。

血は、その豊かな紫色が ムーア人(5)の中に在る
信頼を示して確認すると 彼の中に
心の真暗闇を顕に示し、

〈インク〉に変身して彼の信義心の無さを書くこととする。
唯、血の付いた彼の唇は赤くみえるが、
まるで彼らが言ったことを恥じているみたいだ。

それから、彼は黒ずんだ肌の持ち主なので(6)

自らの内部の地獄の影が

彼をもはや光に晒さないのだ、

しかし 君自身の〈墓碑銘〉はこのように書かれている。

ここに 破裂して 逝つて 顧みられることなく

横たわるは ファイダの心臓！ おお十分に報われた！(7)

〔M・六四〇—四一〕

訳注

(1) To trust: Pan、牧神のパンは、森、牧場及び家畜の群の神なので、ファイダが元来、田園の娘であることを示す。ここまでの意味、「私は純朴な生活の素晴らしさを過小評価して、最善と世間で目立つことを結びつけて愚かだった」。

作者は、デズデモーナの次の皮肉な明言を心に浮べていたかも知れない。「私の心は／夫の人柄そのものにもまだ圧倒されたのです／私はオセロー様の心の中にその全貌を見て／その徳と勇氣に／私の魂と運命を捧げました」
〔オセロー〕I・iii・二五—二五五〔Ma・三二一〕

(2) And meanest things: bend 強力な人々は卑しいさもし
い誘惑によつて不信心に導き入れられる〔RA・六六七〕

(3) by / That life destroy fidelity 君の例によつて他の人々

に忠節を思い留まらせる〔同〕

- (4) A bad trees fruit will be descri:d 「マタイによる福音書」7・18、20 「良い木は悪い実を結べないし、悪い木は良い実を結べない。こうして、その実によつてあなた方は彼らを見分ける」参照。尚、'descri:d' は一六七八年版では、'descri:d' になっていたもの。〔GM〕の提案による校訂で底本になったもので、それで前行末の、'hide' と押韻するし、文脈上も妥当になる〔Ma・同〕〔RA・同〕

- (5) Bloud...at the heart (ハ)からのこの三行。血の赤は、ムーア人であつてさへ誠実の証だが、ファイダを裏切る者にあつてはまさにその血が真黒に變つている〔RA・同〕

ムーア人の中の誠実さを示し、その証拠を挙げる〔Ma・三三三〕

- (6) Then, since he wears...Fida's heart (ハ)にみられるのは、悲劇の状況に屈して悲嘆の余り死のうという理屈に叶つた「決意」だが、これは、それまで不実なムーア人の「あの悪辣な罪」を強調してそれを最高点にもつてゆこうとする決心の、劇的な逆転である〔Ma・同〕

- (7) O well rewarded これは勿論、甚だアイロニーに満ちている〔同〕

この八音節詩行二行連句の六行詩五連の詩は、ヴォーンによるシェイクスピアの『オセロー』論だ、というマリラの見解は瞠目に値いしよう。マリラは迷べる。これはデズデモーナの死を想像力を駆使して描いたもので、オセローの性格を厳しく非難したものであると。そして、この詩をそのようにみると、ヴォーンには、この劇の哲学上の暗示がはつきり分らなかったか、それとも、誤りを免れ難い人間性に対するシェイクスピアの寛大な態度は共有できなかった、ということになるうし、ヴォーンはオセローの犯罪を全く見下げ果てた性格の行為だと見做していたようだとも。

この詩は、ファイダの死を絶望からの自発的な逃避として描き、彼女の悲劇を、彼女を滅ぼした不実を非難する評釈だとして支持するものだと言うマリラは、この詩はファイダの独り言として読まれるべきもので「作中の「ファイダよ」は自らへの呼びかけとなる」、全篇に及ぶ劇的な要素は、ヴォーンの詩全体の重要な特徴を示していると看る。

マリラはこの作品を、直前のファイダを扱った詩とは異なつて、ヴォーンの成熟した様態の特色を示すものだと、高く評価する。この詩がファイダの独白なら、拙訳も女性

の言葉遣いに調子を改めなければならなくなるが、とにかく、ヴォーンの『オセロー』論だとこの詩を見るマリラの見解（以上「Ma・三二〇―二二」）は貴重であり、幅広く深く働く想像力の持ち主としてのヴォーンの価値を、一層高めることになろう。

ハッチンソンは、この作品は作者の実際経験に基づいているだろうと考えているが、それを「何か分けが判らず、魅力がない」『cryptic and unattractive』（H・八八）と言うのは戴けない。簡単にこのような評言で片づけるのでは、ヴォーンの優れた伝記作者にしては、文芸作品に対する美的想像力に少なからず欠ける、とみられても致し方なからう。

まず、リュシマコスなる人物との思い出（「著者も共にロンドン在住中のリュシマコスへ」）によって、存在を幽かに暗示されたファイダは、魔女と呼ばれ得る程魅力溢れる姿となって鮮明に浮上する（「ファイダ、即ち田園の美女。リュシマコスへ」）が、続いてこの作品にみられるように忽ち一転して沈んでしまう。この三篇は三幅対となつて、人間の運命についての省察を促して「執念深い運命、カントレフのパウエル博士に向けて書かれた」（「続小考（七）

33-42」と呼応し、また、ファイダなる女性の登場によって、既に見た（アモレット詩篇）（「続小考（四）8-40」）及び（エテシア詩篇）（「続小考（三）25-35」）と相い呼び合う。

微妙巧妙な構成を然りげなく誇る詩集『タレイアー』は、次にひよいと、あの、文学仲間のオリンダ、この詩集の冒頭部に四篇並ぶヴォーン讃歌の一番手（「M・六一七―一八」）その拙訳は「続小考（二）45-47」の作者への、ヴォーンの讃歌「無双のオリンダの編集者へ」（「続小考（三）18-20」で紹介済み）が収録される。そしてその次に、短い、八音節詩行二行連句の一六行が現れる。

トレヴァー判事の悲嘆極まりない突然の訃に接して

*Upon sudden news of the much lamented death of
Judge Teyvers*

〈学識〉と〈法律〉であるあなたの〈生涯〉は終わった、
あなたの仕事もまた、あなたが去ってしまうなんて！

トレヴァー、あなたを愛していたのに、ここから飛び去つた、

それで〈正義〉は、長らく〈病んで〉いたが、死んで

しまった。(2)

トレヴァー！ あなたの貴重な羨まされていた部分といえは賢明にして且つ人を引きつける心だったので

その爽快で丁寧な言葉遣いだったら 動かせただろう
鞆鞆人(3)やゴート人(4)も この上なく気高い愛へど。

大胆な(悪徳)と無知(5)が、今やずうずうしく振る舞い、
(灰色のグロート銀貨(6)のように) まかり通る、罅割れて、

その間 賢人のあの唇は黙して冷たいままながら、
あなたの言葉は 十分に吟味され試練に耐えた黄金だ。

おお どれ程 奥床しい欲望にとつて
純粹な(光(8))は愚かしい火とは異なっていることか！

しかし汚らしい(澱)は(葡萄酒)より長保ちするが、
(日没)後に(ツチボタル(10))は 光り輝くのだ。

[M・六四二]

訳注

- (1) グロサールの考証 (Grosart, ii: 231) 以来、他の人物が二人ほど挙ってきたが、ハッチンソンの次の同定が殆ど確実 [Ma・三三四]
- 一六六一—一六七年 (死去) までブレックノックの巡回

陪席判事 (Puisne [pi: ni] Judge) を勤めたアーサー・トレヴォー (Arthur Trevor) で、「国教会と王に忠誠を尽したせいで苦難を被った人々の一人であるテンブル法学院 [ロンドンにあった四法曹学院の一つ] の判事。最近突然死去した」として、デイヴィッド・ロイドの『回想録』 (David Lloyd's *Memories*) に名が出る [H・二二七—八] 標題の 'Trevors' = Trevor's [Ma・同]

(2) Right, which long lay Sick, is dead 「正義」を体現していたトレヴァー判事の死を悼むことで、作者の現在の思い——王政復古後も、それに先立つ二〇年間の政治の大変動によって起ったこの国の倫理・精神上の大規模な墮落からの「贖い」が殆ど見られない——が表明されている [Ma・同]

(3) Tartars タタール族。主にモンゴル系・トルコ系諸部族の総称。中世に Genghis Khan (成吉思汗, 1162? - 1227) に率いられてアジアと東ヨーロッパの大半を席捲した。しばしば粗暴・凶暴な人を指す。

(4) Goths 三—五世紀にローマ帝国領内を侵略し、定住したゲルマン族の一部族、しばしば粗野・野蛮な人を指す。

(5) Vice and blindness 諸悪—悪意によるものと無知によるもの [Ma・三二五]

(6) grey groat 一二七九—一六六二年に発行されていた、約四ペンス相当の英国の貨幣 (銀貨)。ひび入りのこの銀

貨は、無価値なものを表す譬喩として一般に使われた
〔F・三九二〕

この主旨。悪徳や偏見が今や美德のふりをし、悪貨
が良貨として流通できるようになるだろう。道徳を装っ
た悪徳という観念は、「道德劇」以来のもの〔RA・六六
八〕

「道德劇」(Morality Play) 一四—一六世紀にかけて流
行した寓意形式の劇で、美德、悪徳、強欲、大食、など
が擬人化されて登場する。

(7) desecret desires ヴォーンが愛用する、頭韻で且つ一種
の「撞着語法」(oxymoron)。

(8) pure Light 四行目の 'Right' あるいはトレヴァーのよ
うな法曹 [Ma・同]

(9) foolish fives 九行目の 'Vice and blindness' あるいはト
レヴァーとは違う詐欺師 [同]

(10) Gloworms ツチボタルの小さい光は、日没にしか目に
見えない [RA・六六八]

「燧石」所収の名作「夜」[小考(七) 35-40] 二行目に
「あの聖なる覆い、(ツチボタル) が輝いて(月)の面を
照らす時のように」と出てくる。同「小考」四〇ページ
の、その象徴についての説明参照。

「夜」のあの箇所。ツチボタルは月の光を反射すること
で光るが、それは、人間の精神はキリストの光を反射す

ることで輝くように、と言いたいのだろう〔RA・六二
七〕

十七世紀には、「ツチボタル」を譬喩に使うと、しばし
ば人間を軽蔑するものだったと OED は記録するが、
ヴォーンはそのような慣習を拒むのが特色だ〔RA・同〕
〔詩篇〕22・6 「私は虫であって人間ではない」参照
〔同〕

「ツチボタル」を直喩に使う妙味は、人間を虫に譬える
紋切型の描写を、詩の主な心象に溶け込ませるところに
ある〔P・一四三〕

最後の二行は、前行までの二つの重要な観念を結合す
る役を果す。真の形而上派の流儀で、作者は哲学上の類
似点を見出して主張する、「(悪徳)と(無知)」「汚らし
い(澱)」が「正義」(葡萄酒)より長保ちし、「純粹
な(光)」「(日没)が「愚かしい火」(ツチボタル)に席
を譲るのが、(自然)に同調することなのだ〔Ma・三
二五〕

〔C・W殿〕「続小考」(七) 23-30 訳注(7) 参照。

学識と法律そのものとして正義を体現していた知人の判
事を、日没後にしか、いや、日没後にこそ、眼に見えるも
のとなる光を発するツチボタルに譬えて、その死を悲痛し

た追悼詩である。

以上の五篇によって、『タレイアー』所収のヴォーンの自作詩全四一篇の拙訳が終った。

この詩集には、ヴォーン作品が始まる前に、既に拙訳紹介済み「続小考(二)45-55」のように、作者の知友四人それぞれによる四篇の〈ヴォーン讃歌〉が掲載されていた。それは三作目の詩集『白鳥』の場合も同じで、作者の作品の露払いの如く、三人の友人によるヴォーンへの献呈詩が最初に並んでいた。その三篇も出現順にみておきたい。

まず、トマス・パウエルの詩。彼は『タレイアー』でも冒頭部に、作者を讃える一八行の詩「彼の学識高き友人シルレス族の裔びとヘンリー・ヴォーン氏の巧妙な詩について」〔続小考(二)47-49〕を寄せていたが、あの詩が実は一六四七年に出る筈の『白鳥』への寄稿詩だったのであり、この詩集が政治上の配慮で出版が遅れたために、『タレイアー』に回され、その代りに新たに『白鳥』用に書かれたのがこれだ、とマリラの見る作品である〔Ma・一六〇〕。

この上なく才氣縦横の双生児兄弟

エウゲニウス・フィラレテスと以下の詩篇の作者

について

Upon the most Ingenious pair of Twins,

Eugenius Philaethes, and the Authour of

these Poems

どの〈惑星⁽²⁾〉? 君たちの誕生を支配したのは。どの機智

に富む星?

これ程似ている君たちときたら! 〈肉体〉同様〈魂〉まで。

これ程共に似ていれば、君たち⁽³⁾生まれついでいるようだ

あの星の技法を卑俗な〈誹謗〉から解き放つようと。

私の疑いは溶け、ここから私は信じ始める、

君たちの顔だけでなく、君たちの才智が〈双生児〉だと。

この潑瀾たる〈双子座⁽⁴⁾〉は、地上から昇ってゆく時

新しい光を眼の鈍った人類に与え、

〈星の〉観測者たちに教示し彼らの〈眼〉を喜ばせるのだ

一つの〈星座位置〉を〈大空〉にしっかり据えて。

オックスフォードの T・パウエル

[M・三二六]

訳注

- (1) Eugenius Philaethes ヘンリー・ヴォーンの双子児の弟トマスの筆名。
- (2) What Planet...Bodies are ヘンリーとトマスはそっくりの双子児だったという貴重な示唆。知られる限り、この二人の顔つきについての同時代の証拠が他にない [Ma・一六〇]
- (3) you seen born to free / The starrie art from vulgar Calumnie 占星術はまだ広く科学として評価されていたものの、懐疑主義者たちの攻撃に晒され始めていた [RA・四六七]
- (4) Gemini 神話の双子児カストールとポロックス (Castor and Pollux) で、彼らは死後、星になって大空へ昇りさられた [同]

ヴォーン家の双子児兄弟を知悉する者の、身心共にそっくりの優れた二人を簡潔に讃えた〈露払い詩〉である。弟のトマスも「登場」させたのは、彼もこの次の次に詩を寄稿しているからであろう。

六行と四行の二連から成る一〇音節詩行二行連句一〇行の小品。顔だけでなく才智まで双子児だと述べる第一連の最後と、双子座が昇天する時、大空に星座位置を定めるといふ、第二連の最初と最後の行の、総計三行が、一一音節になっている。

次に、友人による賞讃詩が掲載される。

我が友なる作者へ 彼の以下の詩篇について

To my friend the Author upon these his Poems

私はそれをおつて我が怠慢と呼んだ⁽¹⁾、夥しい〈書物〉が深く積み上っている時代に、私に一ページもないなんて？しかし取り消して誓おう つましい〈心遣い〉だったと私の〈ペン〉をつまらない製品には費やさずにそれを〈逸品〉⁽²⁾にすべく息を吹き込んだのは、何しろその強力な輝き⁽³⁾は

その奮闘者に報いて 彼を洗練するのだから、

かかるものが君の〈詩〉なのだ、友よ、君が書き出して以来私には⁽⁴⁾ 如何なる名のある人にも、才人としてしか応えられない、だから私を呻かせる大勢の中で⁽⁵⁾

私だけが根柢なき〈異論〉にならないようにしたい、
 というわけで私は議論するのだ 屋内の〈主人〉の代りに、
 戸口の〈鬚〉⁽⁶⁾に敬意が払われたこと〈あった〉のかと？
 誰が心に留めようか？ 気乗りのしない〈案内人〉の
 細長い脚や空ろな眼を、美しい〈貴婦人〉が傍にいるの
 にかくして私はすらすら罪を犯す⁽⁹⁾ 私は強化しようとして
 しているのに 私の保護を〈指令〉する手
 の近くで、それで君はなるのだ 私にとつて
 直ちに 私の〈主題〉⁽¹⁰⁾と〈安全確保〉に。

オックスフォードの I・ロウランドソン⁽¹¹⁾

[M・三七]

訳注

- (1) I call'd it: a page 冒頭の二行を換言すると「執筆とい
 う点から測ってみて甚だ多くの書物が深々とあるような
 時代に一ページも書かなかつたことを私は怠慢だと考え
 たことがあった」[Ma・一六一]
- (2) breath'd it for a Prize 息を吹き込もうか休もう、逸品
 に来るように。〈逸品〉とはこの詩の製作 [Ma・一六
 一—一六二]

(3) whose powerfull shine...and refine 換言「その強力な輝
 きは奮闘者である私に報いてくれると共に私を洗練して
 くれる」[同]

(4) for since th' last writ...any name, but wit 換言「君が大
 変有名な作者になってしまった今では、人々は私を君と
 の繋りの故に〈才人〉と見做してくれ」[同]

(5) And lest amidst...grove 褒めるようにと群衆が圧迫す
 ることで引き起される不愉快を示す、従つて次行の：
 Herse alone までの換言「そういう主張をする私の詩が
 群衆によって真実を辻褃の合わない誤つた表現にするも
 のと見做されないように」[同]

(6) Thus I dispute...for Lord within 意図されている平行関
 係は明らかで、〈鬚〉が〈主人〉との結びつきで敬意を払
 われるように、ここでの語り手は『白鳥』の有名な著者
 との友情のせいで尊敬されるという主旨 [Ma・一六二]

(7) Beard 'Grey beard' 「うま塩ひげの老人」の短縮形
 「Ma・同」などと考えずとも、勿論「あごひげ」なる身
 体の一部でその人全体（この場合、屋内の〈主人〉）に仕
 える召使い）を表す提喻 (synecdoche)。

(8) Who notes...Usher...Lady by 君という覆い隠すような
 存在がある時、どうして私が注目されるのを期待できよ
 うか [Ma・同]
 〈案内人〉はこの詩の語り手、〈貴婦人〉は『白鳥』の

作者。

(9) Thus I *sime* freely (1)に集成されている詩の作者から名声を手に入れようとするので「私」は「罪を犯す」。こういう表現は、この種の作品の当時の常套手段「Ma・同」。これまで見てきたように、ヴォーンも「賞讃詩」でしばしば実践している。

(10) *Subject* 詩の「主題」と、この語の別の意味「従属者」(王の臣下)との地口「Ma・同」

(11) *I. Rowlandson Oxoniensis*, おそらく John or James Rowlandson. 共に一六三〇—四〇年に、オックスフォードのクウィーンズ学寮に在籍していた「M・七〇四」

訳注で取えて紹介したようなマリラによる丁寧すぎるまでのパラフレーズ(換言)は必ずしも必要ではないものの、ヴォーンを讀えようとする詩だけに、同じように面白い譬喩を唐突に駆使する込み入った作品である。

全て一〇音節詩行二行連句の一八行の詩。

もう一篇、弟トマスが、兄ヘンリーの詩について書いた作品が前口上として次に現れる。弟がどのような詩を書いたかを垣間みせる貴重な資料となろう。六行目だけが一一音節である以外は、前作と同じ詩型の三二行の作品。

次の詩篇に Upon the following Poems

私はここには書いていない、まるであなたの学ある大勢の友人の中の殿(ごうり)になるみたいに、あなたの書いたものもつと多いと知られている、

彼らなら見つけられるだろう、このことを教えられれば報酬なしで〈詩人たち〉を護る方法を、

そしてあなたの〈版〉に向かわせるだろう、〈都市〉が

〈市長〉の〈請願〉に応じて差し出す程多くの手(3)を

しかし、あなたはこれには何もしないだろう、それが我々の〈礼節〉というよりあなたの〈召集(4)〉になつてはいけな

いので、

あなたは〈代議士(ナイツ)〉がするように請い求めたりはせず(5)

〈声(6)〉と、〈州〉の賛成票とによつて、〈詩人〉になろうと

する、

それで十分だったのだ、あなたの〈詩神〉を進ませるには

〈松葉杖(8)〉の間へと、いや、それは我々の〈慈善〉を一層

高めることになりそうなので、我らはそれが適切だと思え

ばいい

〈国家〉が才智に頼つて〈病院〉を建てるのを。

しかし、ここでは救済は必要ない、〈あなた〉の一層豊かなな〈韻文〉⁽⁹⁾が

あらゆる〈詩人たち〉を創り出すので、ただ復唱すればいいのだから、

それで彼らは、自らの土地によって生活が向上した〈小作人〉のように

判る限りあなたに〈使用料〉を支払うべきなのだ、あなたはあの嘆かわしい〈国〉⁽¹⁰⁾の民ではなく

贅意を至福の〈施し物〉⁽¹²⁾にして示すか⁽¹¹⁾

その寄せ集め覚え書は、あらゆる点での〈特許証〉⁽¹³⁾だ、但し、〈王による〉許可は受けていないだけのこと。

そういう掻き集め請願もなしにあなたは出掛けてゆくのだ、あなた特有の価値で〈武装して〉(私の表現だが)

だから友人たちのこういう騒音は必要ないのだ、我々が書くのは愛からであり、あなたの必然性に迫られてではないのだから、

しかも、この陰鬱な時代は或る不可思議な

〈詩〉への〈嫌悪〉⁽¹⁵⁾に取り憑かれている、

それでも私は思っている(あなたの空想は大変楽しい)〈清教徒〉⁽¹⁶⁾はあなたの〈改宗者〉になるのではないかと、

そしてあなたの炎は、一たび戸外で輝くとあなたに、あなたの詩行と同じ程多くの友人を作り出すだろうと。

オックスフォードのエウゲニウス・フィラレテス
[M・三七―三八]

訳注

- (1) here この詩集 [Ma・一六三]
- (2) this この出版 [同]
- (3) hands 労働者、及び読者を表す提喻。直前のロウラン・ドソンの詩の一六行目にも「手」「単数」が使用される。
- (4) Thy Master 自ずから寄稿されたものではなく、書き手が自らの詩集のために己への賞讃詩を集めたもの。
- (5) Thou wouldst not beg...*suffrage* of the Shire 州の代議士志望者(議会で州を代表する自由土地保有者によって選出させる)が請願することへの言及。そういう紳士たちによって乞い求められた得票と、詩人に与えられるべくしての自由な賞讃とを、トマスは対比した [RA・四六八]
- (6) Voice = vote 「投票」 [Ma・一六三]。即ち、読者の声。
- (7) That were enough...*an Hospital for wit* この四行、この

本で賞讃詩を請い求めたりするのは、自ら劣っていることを暗示するのだから、才智がせいぜいでも病んでしまっていることを示唆するものだろう、の意【Ma・一六三】

- (8) *Crutches* 松葉杖を突く障害者、劣った詩人の譬喩
【Ma・同】、関わりのあるもので表す換喩 (metonymy)。

ここからの三行、おそらく傷病兵用病院への言及だろう【M・七〇四】。トマスもヘンリーも医師。「病院」とは、読者の低い詩心・鑑賞能力を治癒して高める所、場、雰囲気、の譬喩となろう。

- (9) *Thy richer Verse... that can but reverse* この二行の換言
「あなたの豊かな韻文はそれを復唱できるだけの人も全て詩人にしてしまふ」【Ma・一六三】

- (10) *that lamentable Nation* スコットランドを指す【C・ii・三三五】

この「Nation」は「国家」を指さず、当時普通だった別の意味の「ある特定の階級の人々」【Ma・一六三―一六四】へは詩人たちのいる国、の意。彼らの韻文は、もし支持者たちが公に賛意を、富者が乞食に施しをするように与えなければ、受け入れられないのだから【RA・四六六】

- (11) *Who make a blessed Alps of approbation* その請願は、人に、自分の好意の籠った反応を施しをするようなものと、考えさせるのだ【Ma・一六四】

- (12) *fardel-notes* = collection notes この詩の作者トマスの造語のようだ。「notes」は、詩を探し求める覚え書【Ma・一六四】

他のものを包み込むものになりそう (OED *fardel sb.* 3)。賞讃詩は、詩の版のための窓飾り (window-dressing) である【RA・四六八】

- (13) *Briefes* = writings issued by legal authority 訴訟摘要書、弁論趣意書など、法律当局によって発行された書類【Ma・一六四】

「慈善のため特定のものを教会に集めることを認可して君主によって発行された」許可証 (OED *brief sb.* 3)。これは二〇行目の「施し物」の概念を運び込む。前口上の詩は、王の許可証が金銭を乞い求めるためであるように、賞讃を請い希うのだ【RA・同】

- (14) *scrape-requests* おそらく「掻き集められた請願」、多分「褒められない理由なのに賞讃を請い求める振舞いをした詩人たち」。(OED *scrape v.* 10) ではこの語は、不愉快な人々を軽蔑して指すのに種々の語句の組み合わせで現れている【RA・同】

- (15) *Desamour to = dislike of* 【同】／最初の『詩集』の、読者への言葉の中 (【M・2】四―五行目) でも、ヴォーンは、この時代が詩をどれ程粗略に扱っているかと述べている【M・七〇四】

(16) Yet I suspect.../ The Puritans will turn thy *Proselytes*

清教徒は概して、如何なる場合も、文学の理想を促進したりはしなかった。トマスはここで、何か奇蹟的な「例えば、清教徒を改宗させるような」力を、自らの英国国教会の信徒である兄ヘンリーの詩に、認めたいとして「Ma・一六四」

兄さんの学識高い大勢の友人諸氏なら、賞讃詩を寄稿する以外にも、無償で詩人を護る方法を知っていて、兄さんの出版物に多くの読者を惹きつけられるだろうが、兄さん自身そのために何もしないだろう。賞讃詩の類は礼節からの行為だが、著者が「召集」したみたいになつたら困るからね、読者の反応を待つだけでいいのだから、と自分のこの「前口上詩」などは不要なのだと述べ続ける。

〈小作人〉が支払う「使用料」とは、読者が詩集を購う費用のことだが、このような譬喩を駆使しながら、この詩集が、賞讃詩など不用品と讃えながらも、どのようにに価値のある詩群なのか、ヴォーンの作品そのものの優れている点に具体的に触れないのは、他の「賞讃詩」の類と同じである。要するに、自分のこの「露払い」の内包する質のような詩を惹起する性質の内容の詩集、それが、こ

の『白鳥』だと主張することになる。

唯、結末部にみられる暗示——王を処刑するような「清教徒」の時代に、彼らを改宗させそうな内容をヴォーンの作品に見抜いている如き——は特に注目したい。それは、この『白鳥』に言うよりはむしろ、既に殆ど同時進行のようにして成立しつつあった『燧石』第一部、延いては第二部の諸作に当て簞る洞察だろうからである。実際には『燧石』は、我々が既に見たように「小考(二)——(十三)」、清教徒を「改宗」どころか一層反発させるだけのものだったかも知れないにしても。しかし、トマスが認めたがっているとはマリラの見るように「訳注(16)」、「何か奇蹟的な力」を秘め宿していると我々に感じ取らせるのが、『燧石』であり、ヴォーンの詩作であるのは、もう確かなのではあるまいか。

*

これまで底本としてきたマーティン編の作品集「M」〔RA〕も踏襲には、ヴォーンの真作かどうか疑問視されるとしながら収録されている作品が三篇ある。そのうちの一篇だけは、ここに取り上げておきたい。訳注(1)及び(6)、そして筆者自身が、語句の使い方、構成状態な

ど全体から感取する印象（！）によって、一、ま、ず、真作と信
じることにして。次の、ある墓碑銘の詩である。

フランサンフライド教会の墓石の碑銘⁽¹⁾

一六八一年五月一八日に三一歳で

死去した、ブレックノックの記録官にして法学院の、

故ゲイムズ・ジョーンズ郷士を追悼して

Epitaph on a tombstone in Liansantraed Church

In Memory of

Games Jones late of

Grays-Inn Esq. & Recorder of

Brecknock, who died in ye 31th Year

Of His Age May the 18th 1681

〈通りがかる人〉よ〈立ち止まって〉⁽²⁾

知られたし 誰がこの〈石〉の下に横たわっているか

誰の、自分自身のはともかく、〈敵〉でもなかった人

墮落以前のアダムのように生きたが

それでも自らの〈肋骨〉を〈地獄〉と共謀させなかった人

〈手腕〉と〈物腰〉〈町々〉と〈人々〉を見渡し調べたが

身近な美德と己れ自身との彼方へ〈彷徨^{さまよ}〉った人
それも我らの限られた範囲を遙かに越えてだが 我らには
分っていた

当時の彼は現在の彼と余り変っていないかつたと
纏れた〈法〉の岬々たる要塞を

カエサルのように彼は征服したのだった 他所^{よそ}では

めったに出遭わない学識と才幹^{バイツ}を見知っていたので

この上なく緊密な絆^{バイツ}でここでは〈結婚で結ば〉れてさえい

たが それでも彼の才幹^{バイツ}はそれで以って挑戦させるお人程⁽⁴⁾

までには申し分なく高度というわけではなかったし

彼の精確な〈学識〉も それ自体立派な〈憲章〉を

無効にするのに用いられたことはなかった

彼は余りにも早く亡くなったが 余りにも若すぎはしな

った⁽⁵⁾ 自ら示せる程には

〈千六百〉年〈時代〉⁽⁶⁾前になどと。

即ちここに横たわるは 〈兄弟〉且つ〈友人〉で〈息子〉

〈高德〉な〈共同体〉が一つになったもの

それも各々最良のだ、さあ通りがかる人よもう去られたし。⁽⁷⁾

[M・六八六]

訳注

- (1) この碑銘の原文は、一八〇九年の『ブレコン州史』(printed by Theo. Jones, *Hist. Breck.*, 1809, ii, p.332.)に初めて印刷されたもので一九五二年二月八日付「タイムズ文芸付録」725に、ステッド(W. F. Stead)によって提供された。モーガン嬢はこの詩をヴォーンンの真作と思いたがっていた。ステッドは、ヴォーンン家とジョーンズ家との繋りを指摘して、ヴォーンン真作を支持している[*M*・七六一]
- 因に、フランサンフライド教会の墓地にヴォーンンも埋葬されている[*小考* (一) 2, 21-22] 参照。
- (2) *Slav Passenger* この呼び掛けは、標題のようで即本文の冒頭行となる四音節行。これに続く次行(第一行) *And know who lies beneath this Stone* が八音節である以外は全て一〇音節詩行の二行連句二〇行プラス一行から成る二一行と、冒頭の四音節行が加わる詩。最終行(二一行目)の末語 *'gone'* と第一行の末語 *'Stone'* とが押韻する仕組。
- (3) *scantling* = little measure, おそよぶ。(OED *scantling* s³ 3) [*RA*・七〇四]
- (4) *him* 底本だが、文脈からは「神」を指すと容易に読めるので、ラドラム版は *'Him'* [*RA*・四三六]
- (5) *but not too young* この句[四音節]のせいでこの詩は

不規則なものになっており「これを除去すれば他の行と同じ一〇音節行になる」おそらく作者以外の誰かが草稿に書き入れたものである[*M*・七六一]

- (6) *The Age of Sixteen Hundred years age* この尚古主義(*primitivism*) 気味のところなど、とても決定的とは言えないが、ヴォーンンの作品らしさを思わせるところがある[*M*・七六三]

前行の付加句(であることはまず間違いない)のようなハッピーニング(偶発事)が生じているところなども、如何にもヴォーンンの作品らしいと筆者には思われる。

- (7) *now passenger be gone* 最初の標題を兼ねた呼び掛けと呼応する。立ち止まらせた通行人に、さあ、もう立ち去って下さいと促して締め括る。訳注(2)のように、最終行が第一行と押韻する仕組みといい、なかなか洒落れた碑銘詩ではないか。ヴォーンンの真作と見たい。

*

『タレイアー』出版後のヴォーンンには、その死までの七年間、著作がないし、詩作も知られていない。

彼の書いた手紙は九通残されている[*M*・六八七―九九。『タレイアー』の印刷・準備中であることに触れたもの(一六七三年六月十五日付け)が最初だが、最後のは、従弟のオーブリー(John Aubrey, Esq.)宛て、一六九四年十月

九日付け書翰で、ヴォーンの死（一六九五年四月二三日）の半年前であった。

その中に、詩の資質 'yein' —— 「激越発作」 'Rapsus' とか「詩的熱狂状態」 'a poetic furvor' を表すウエールズ語の 'Awen' に触れて、或る真摯な物知りから聞いたとして紹介している一挿話がある。

両親を亡くして貧窮の余り物乞いをせざるを得なくなった少年がいた。幸いにも彼は、ヴォーンの居住地からほど遠からぬ山岳地に、膨大な数の羊を飼っている裕福な人物に拾われ、羊の世話をするようにと山へ送られた。少年は夏の間、羊の群を追い、その子羊たちの面倒をみていて、或る日熟睡した。その時に見た夢の中で、少年は、緑の葉飾りの輪を頭に乗せた美しい若者に出会う。彼は矢を一杯詰めた箠を背負い、拳には鷹を一羽止まらせていた。何かの旋律を口笛で奏しながら近づいてきた青年がその鷹を少年目がけて放つと、鷹は少年の口から体内に飛び込んだ。途端にびっくり仰天、目覚めた少年は、詩人の才能を授かっていた。彼は羊飼いをやめて諸国を巡り始め、機会のあるたびに歌を謡い、生前、国中で最も有名な吟遊詩人 (Bard) になった、というもの [M・六九六]。

この箇所に言及しながらハッチンソンは、ヴォーンは長いこと詩才を発揮するのをやめていたが、この最後の手紙は、彼が詩人の心を依然として保持していたことを示しており、詩人にしか出来ないように夢を語っている [H・二一一] と評釈する。

詩人の夢想と言われればその通りで、科学的精神を備えた医師——先刻も触れたことだが、彼が医師免許をどこでいつ取得したか、文書としての記録が見当たらないことをハッチンソンは懸命に!? 実証しているが [H・二八一—二九四]——ヴォーンは、最後まで紛れもない〈詩人〉であったことは確かであろう。『タレイアー』以後、彼の中の「鷹」は体外へ飛び出したとはいうものの、遠くへ飛び去りはしなかったのだった。

あの、少年の夢に現れた美青年は、〈詩神〉だったということであり、その「鷹」は、詩人を生み出す〈キュービッド〉の役を果たしたことになる。最晩年にヴォーンが自ら語った、自分自身に関する寓喩だった。

本稿（「続小考（八）」）で、本誌におけるヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の全自作詩の拙訳が

終了した。即ち、『詩集』の十三篇、『燧石』の一二九篇（第一部七三篇、第二部五六篇）、『白鳥』の二二篇（含、ラテン語の詩五篇）、『タレイアー』の四一篇（含、ラテン語の詩四篇）の総計二〇五篇（含、ラテン語の詩九篇）、その全詩行総数八、四六七行（含、ラテン語詩一二九行）、その全ての拙訳が一旦完了して、当面の筆者の目的が一応達成された。

うっかり本音を洩らしたり、迂闊に真意を表現してしまうことが生命の危険に繋がるような時世に生きる詩人が、詩人としての本領を発揮し続けるには、如何にあるべきか、その一つの有り方を、ヘンリー・ヴォーンは示してくれたのではあるまいか。諧諷、諷刺のきらめきを放つ屈折・韜晦ふりと、激しさを内包した冷静な作風によって。

英国が、時の国王を処刑までする内乱の最中から清教徒の共和制を経て再び王制に復古する激動の渦中を丸々、ヴォーンは王党派の立場を始終堅守しながら、生き凌いだのであった。〈運命〉のご機嫌取りを拒み、好運を敢えて退けてでも不運に堪え、不運を好運へと、少なくとも堪え得るものへと、転換する生き方を採ろうという、〈運命〉への静かな挑戦の決意を秘めながら。

清教徒と英国国教徒との争乱の時期という当代の世相・政情に、そのような独自の対処を示しているうちに、ヴォーンには、〈神〉の姿がちらちら見え隠れするように、時にはすっかり隠れてしまえさえるようになってきたのだろう。見えなくなりがちになった（我が造り主なる神）に、終始敬われるような神であってほしく、そのような神を常に崇められる自分でありたいという苦汁の滲む願望を読者に読み取らせる、例えば「復活祭讃歌」（小考（十）7—8）など、長短の、それも多種多様な詩型の、作品を集めたのが、ヴォーンの代表作『火花散る燧石』であった。

*参考文献

本誌『成城文藝』第二二一号（二〇一〇年六月）の拙稿「小考（十三）」末尾（二四—三〇ページ）を参照されたい。ここには本稿での直接参考文献のみを挙げる。尚、本稿中、「小考（一）」～「小考（十三）」、「続小考（一）」～「続小考（八）」は、本誌既連載の左記を指す。

「小考（一）」「アスク川の白鳥——ヘンリー・ヴォーン小考」『成城文藝』第一九九号、1—24、二〇〇七年六月。

〔小考(二)〕「その瞑想を追い始める——ヘンリー・ヴォー

ン小考(二)」「同」第二〇〇号、47—67、二〇〇七年九月。

〔小考(三)〕「〈死〉からの再出発——ヘンリー・ヴォー
ン小考(三)」「同」第二〇一号、13—33、二〇〇七年十二月。

〔小考(四)〕「序文」と「反歌」に包まれて——ヘン
リー・ヴォー
ン小考(四)」「同」第二〇二号、1—32、
二〇〇八年三月。

〔小考(五)〕「複眼による並置比較思考——ヘンリー・
ヴォー
ン小考(五)」「同」第二〇三号、1—27、二〇〇
八年六月。

〔小考(六)〕「追求は異なる角度、視点から——ヘンリー・
ヴォー
ン小考(六)」「同」第二〇四号、15—42、二〇〇
八年九月。

〔小考(七)〕「花と星へ 嵐と夜から苦悶に耐えて——ヘ
ンリー・ヴォー
ン小考(七)」「同」第二〇五号、13—
43、二〇〇八年十二月。

〔小考(八)〕「〈隠された宝〉へ向かって——ヘンリー・
ヴォー
ン小考(八)」「同」第二〇六号、17—66、二〇〇

九年三月。

〔小考(九)〕「哀歌に託す自己励起——ヘンリー・ヴォー
ン小考(九)」「同」第二〇七号、1—33、二〇〇九年六
月。

〔小考(十)〕「昇天と復活への思い——ヘンリー・ヴォー
ン小考(十)」「同」第二〇八号、1—28、二〇〇九年九
月。

〔小考(十一)〕「独立と連合と——ヘンリー・ヴォー
ン小考(十一)」「同」第二〇九号、29—59、二〇〇九年十二
月。

〔小考(十二)〕「高潔な正義を求めて——ヘンリー・ヴォー
ン小考(十二)」「同」第二一〇号、16—55、二〇一〇年
三月。

〔小考(十三)〕「全体像把握へ向かって 試訳完了——ヘ
ンリー・ヴォー
ン小考(十三)」「同」第二一一号、1—
31、二〇一〇年六月。以上で、『燧石』全訳完了。

〔続小考(一)〕「補遺と増幅——ヘンリー・ヴォー
ン、『火
花散る燧石』以後の」『成城文藝』第二一五号、19—47、
二〇一一年六月。

〔続小考(二)〕「思いは弱まることなく——ヘンリー・

ヴォーン『甦ったタレイアー』の世界』『同』第二一六号、29—56、二〇一一年九月。

〔続小考(三)〕「対話精神の探求——ヘンリー・ヴォーン、呼応—初期と後期と」『同』第二一七号、1—36、二〇一一年十二月。

〔続小考(四)〕「愛」の詩による出発——ヘンリー・ヴォーン、国情を冷厳に凝視する」『同』第二一九号、1—48、二〇一二年六月。

〔続小考(五)〕「優雅にのみは啼けない——アスクの白鳥ヘンリー・ヴォーン」『同』第二二〇号、1—24、二〇一二年九月。

〔続小考(六)〕「賞讃詩と追悼詩——ヘンリー・ヴォーンの「想ひ」」『同』第二二二号、1—36、二〇一二年十二月。

〔続小考(七)〕「運命」への静かな決意——ヘンリー・ヴォーンの姿勢」『同』第二二二号、1—44、二〇一三年三月。

〔続小考(八)〕「激動期を生き凌いだ詩人——ヘンリー・ヴォーン的全自作詩試訳完了」『同』第二二三号、1—34、二〇一三年六月。本稿

ヘンリー・ヴォーンの詩集

『詩集』『詩集、ユウェナリスの諷刺第十歌の英訳付載』*Poems, with The tenth Satyre of Juvenal Englished* (1646)

『燧石』『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655)

『白鳥』『アスクの白鳥——詩と翻訳精選集』*Olor Iscannus: A Collection of Some Select Poems, and Translations* (1651)

『タレイアー』『甦ったタレイアー——その時々の詩を選出した田園の詩神の気晴らしと気分転換集』*Thalia Reiviva: The Pastimes and Diversions of a Country-Muse in Choice Poems on Several Occasions* (1678)

〔C〕Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2 vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

〔F〕Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.

〔GM〕*A Commentary on the Poems of Henry Vaughan* compiled from the collection of Louise Imogen Guiney,

- supplemented by the notes of Gwennllan E. F. Morgan, selected and transcribed, with additional observations, by F. E. Hutchinson (typescripts in the National Library of Wales and the Bodleian Library).
- [H] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.
- [H・S] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- [J] Leishman, J. B. *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.
- [JH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1854.
- [M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 本誌の底本。
- [M・a] Marilla, E. L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*. Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.
- [P・A] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press,

1976.

- [T-] Tuttle, Imlida. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1969.
- [W-] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- [OCD] *Oxford Classical Dictionary*, 1949, reprinted 1968.
- [OED] *Oxford English Dictionary*
- 尚、一連の拙訳での〈 〉付きは、原詩では大文字で始められる語句、ロチック体は同じくイタリック体の部分である。原詩での固有名詞は全て大文字で始まるイタリック体なので拙訳ではカッコ無しの普通の字体のままにする。
- 訳注のうち、出所表示（例えば [M・a・二一五]）のないもの、及び訳注の中の「」部分は本稿筆者による。

謝辞

本誌上でハンリー・ウォーンの全自作詩訳完了までの間、御尽力下さった本誌編集委員の諸氏と本学部の皆様、並びに絶えず激励を惜しまれなかった全ての方々、そして常に美しく正確に印刷を担当された印刷所に、心から深謝申し上げます。